協力を得て
更生保護活動を

談

法務省保護局長
本江　威憙

全国約五万人の保護司をはじめ多くのボランティアの力を支えに

益子　去年、「社会を明るくする運動」の一環で、東京駅でひまわりの小鉢をお配りするというキャンペーンに参加させていただきました。そのとき、更生保護のお話に関連して保護司さんについて初めて伺って、すごく興味をもったんです。こちらの法務省保護局が、そういったお仕事を担当されているのですよね。

本江　はい。私ども保護局の一番大きな仕事が、罪を犯してしまった人や非行に走っ

民間の方々の世界に誇れる

対

スポーツコメンテーター
益子　直美

た人を立派に更生させて、社会に復帰してもらうことなんです。

具体的には、家庭裁判所で保護観察処分に付された人、仮釈放で少年院を出た人、刑務所を仮出獄した人、あるいは裁判所で刑の執行猶予はついたけれども保護観察に付するということに決まった人などが保護観察の対象になります。そういう方々に対して、保護観察という制度の中で就職のお世話をしたり、悪い道に再び戻ったりしないようにいろいろ助言したりして、指導、援護するという仕事です。

益子　全国で何人ぐらいの方が、そういっ

たお仕事に就いていらっしゃるのですか。

本江　保護局の職員は全国で一千四百人足らずです。しかも、実際に保護観察に当たる保護観察官が全国の保護観察所に配置されているわけですが、その保護観察官は六百人ぐらいしかいません。保護観察の対象になる人は常時六万五千人ほどいますので、単純計算で一人が百人以上を担当することになってしまいます。

益子　たいへんですね。

本江　ええ。これだけではとても足りませんので、一人の対象者に保護司さんが一人ずつついて、その役割を果たしてくださっています。これは国の仕事ですから、身分は非常勤の国家公務員ですけれども、実態は完全なボランティアです。そういう保護司さんが、全国津々浦々に約五万人おられます。

益子　保護司さんの年齢層というのはどのくらいなんですか。

本江　年配の方が多いんです。いま、自分の生活だけで精いっぱいという時代の中で、立派に生活しながら、なおかつボランティアとして社会に貢献してくださるという方を確保しなければなりません。これがなかなか難しいのです。

　ただ、更生保護に携わってくださっている民間ボランティアは、保護司さんだけではなくて、更生保護婦人会という会に入ってくださっている方が約二十万人おられますし、若い人では、青年たちがＢＢＳ（Big Brothers and Sisters）という会をつくって支援してくださっています。

　更生保護は、刑務所や少年院と違って、一般社会の中での処遇ですので、ともかく全員を就職させなければなりません。その就職も前科があるとなかなか難しいものですから、保護司さんなど民間の方々が一生懸命に就職先を探してくださいます。

更生の意欲を受け入れる社会環境をつくることが大切

本江　更生保護分野では、このほかにも更生保護施設があります。罪を犯して処分を受け、あるいは服役したりしたのちに社会に出てきても、身寄りのない人が結構いらっしゃいます。刑務所の門で「はい、さようなら」ということでは、なかなか就職もできないし、寝るところもない……そういった人たちをお預かりする施設です。

　国の予算で寝るところと食事をきちっと用意して、そこから就職先に通って資金を得、ある程度資金がたまったところで一本立ちして社会に出ていく――そういう施設が全国に百あります。その施設で働いている人たちも、ボランティアに近いような給料しか出ないのですが、一生懸命やってくれています。

益子　自分の犯した罪をきちんと反省というか後悔して、独り立ちしていかれるわけ

ですね。

本江　少年院とか刑務所を出てきて保護観察になる人は、更生の意欲が認められて満期になる前に仮釈放された人たちですから、社会復帰を目指して頑張っておられるわけですが、残念ながら全員うまくいっているわけではなくて、一定の比率で再び犯罪の道に戻ってしまう人たちもいます。それは非常に残念なことですけれども、更生保護に携わってくださる人は、対象者が何とかして立ち直りたいと思っているその気持ちを信じて、一生懸命支援しているわけです。

益子　そういう人たちを受け入れる環境を、しっかりつくってあげることが一番大切なのでしょうね。

本江　そうです。一度罪を犯したとなると、そういうレッテルを張られて社会に受け入れてもらえないということになりがちですので、国のほうから手を差し伸べて、いろいろ支援していくことが絶対的に必要なんですね。

明治時代、当時は刑務所長のことを典獄と呼んでおりましたが、もう二度と犯罪はしないと典獄に誓って出てきたけれども、家族がいなくて、親戚（しんせき）からも受け入れてもらえずに、自ら命を絶った人がおりました。それをみかねた静岡県の金原明善という実業家が、更生を誓って努力している人を立派に社会に戻してあげるために、何か手を差し伸べなければいけないということで、そういう人を預かる出獄人保護会社を明治二十一年につくりました。それが、現在の更生保護施設の発端になったわけです。

益子　更生保護施設のもととなったわけですね。

本江　ええ。日本にはそういう思いを次々と引き継いでくださる非常に立派な人が多いのです。本当は国の予算で更生保護行政をやっていかなければならないと思いますし、また、それを全額国の予算でやっている国もあるのですが、日本は先ほどお話ししたとおりわずか一千四百人足らずの職員しかいませんので、五万人の保護司さんをはじめ更生保護婦人会とかＢＢＳなどの皆さんに支えられて、いまの更生保護行政が成り立っているという状況です。

どんな分野のボランティアだろうと その気持ちは変わらない

益子　それにしても、これまでお話を伺っていて、更生保護活動はボランティアの皆さんの力が大きいんだなと感じました。

本江　益子さんもいろいろボランティアをやっておられるとお聞きしましたが。

益子　小学生にもバレーを教えていますし、このところ中学生とも話す機会が結構多いのですが、私はいま、障害者の人たちにバレーボールを教えているんです。病気や交通事故のために足を切断されたり、下

半身に筋肉のつかない方たちと一緒に、シッティングバレーボールという、座ってやるバレーボールをやっているんです。

本江　車椅子でやるのですか。

益子　それが、車椅子じゃないんです。義足を外して、地べたに座ってやるんです。お尻を上げて移動して、手だけでスパイクしたり、本当にうまくこなしていらっしゃいます。シッティングバレーを初めて見たときは、同じバレーボールなんだけど、これはすごいスポーツだなと、本当にびっくりしました。一応、元全日本というプライドもあって(笑い)、実際にやってみたのですが、全くお話にならなくて……。

　最初は、障害者の方のお手伝いをしたいとか、そういう気持ちではなかったのですが、負けず嫌いな性格が起き上がってきて、これはうまくなりたいなと思ったのが、このボランティアを始めたきっかけでした。

本江　そうでしたか。

益子　現役時代は、ああ、また明日きつい練習があるなとか、そういう感じでしたけれども、初めて自分から練習したいなと思わせてくれたのがシッティングバレーだったんです。やっていくうちに、私の知っているバレーボールをみんなに教えてあげればもっと強くなるし、私の仲間の百九十センチぐらいの男子を相手に練習していけば、もっとレベルが上がるんじゃないかなと思うようになりました。

本江　私を含めて、日本ではあまり知られていませんね。

益子　車椅子のバスケットボールとかはパラリンピックなどで有名ですけれども、シッティングバレーは、日本にはチームもまだ三つ四つしかないですし。というのも、シッティングバレーができる環境が整っていないんです。障害者の使える体育館も少ないですし、ポールとかネットとかも特注で、ボールだけはバレーボールと一緒なんですけれども、なかなか施設がなくて……。

本江　全日本の女子バレーボールチームでエースアタッカーを務められたことで有名な益子さんが、ボランティアに一生懸命になられるのは本当に素晴らしいことだと思いますね。

談

益子　私、いまでも自分でボランティアをしているという意識は全くないんです。更生保護に携わっていらっしゃるボランティアの皆さんも、その気持ちは同じだと思うんですね。私の場合、ただ自分がバレーが好きで、みんなに会いたいなという気持ちがすごく強いんだと思います。

更生保護の思想、考え方をできるだけ多くの人に知ってほしい

本江　近年、お金をかけてやるというシステムだけでは社会が成り立たなくなって、ボランティアの人たちの果たす役割が非常に重要になってきていると思うんです。先ほどお話しした更生保護婦人会の方々は、それぞれの地域の活性化のために努力しておられる。また、母親たちを集めて、子育ての支援をしてくださったりしている。こういう活動も皆ボランティアですけれども、そういうことだけに限らず、いろいろな意味でボランティアが絶対に必要な社会になってきているような気がしますね。

　そういう意味では、更生保護の分野は、保護司さんをはじめいろいろなボランティアの方々が結集してくださって、私どもも

非常に感謝しています。諸外国を見ても、更生保護の分野でこれほど民間のボランティアのお力を借りている国はないのです。

益子　そうなんですか。

本江　日本では保護司さんはじめ、民間の方々が世界一の更生保護システムをつくってくださっていると自負しています。欧米で、これほど更生保護活動にボランティアが参加していないのは、罪を犯した人に対する偏見というよりも恐ろしいという意識が勝ってしまっているようです。

しかし、日本の保護司さんは、ある意味では身の危険があることも意に介さず、無期懲役や重い刑に処せられた人でも、臆（おく）することなくどんどん抱えてくださるんですね。しかも、ほとんどの保護司さんが対象者を自分の家に招き入れて、お茶やお茶菓子を出したりしながら悩みを聞いたり、話し相手になったり、時には厳しく叱責（しっせき）したりしてくださっています。これは、国としても本当に感謝しなければいけないことで、一層、更生保護行政に努めて、罪を犯した人が少しでも再犯の道を歩まないように努力していきたいと思っています。

益子　更生保護のお仕事、保護司というお仕事を知らない方って、まだたくさんいますよね。

本江　日本は治安のいいことでも世界一ですから、あまり社会から注目されないんです。治安が悪くなってくると、更生保護も注目され始めるのですが、あまり興味を持たれない。けれども、刑務所とか少年院に入った人たちを教育して、立派に独り立ちして社会復帰してくれるようにすることも非常に大切な仕事ですから、私どもはもっとアピールに努めなければいけないと思っているんです。

益子　ぜひ大勢の方に知っていただきたいですね。

本江　更生保護の思想、考え方をできるだけ多くの人に知ってもらいたいということで、毎年七月一日から一か月間、「社会を明るくする運動」を行っているのですが、今年で四十九回目になります。益子さんにご参加いただいた東京駅での広報活動だけではなく、各県ともそれぞれの街頭でやっていただいておりまして、最近では四百五十万人ほどが参加してくださっています。

益子　今年は、更生保護制度が発足して五十周年だそうですね。

本江　私どもの更生保護制度の最も基本になるのが犯罪者予防更生法という法律でして、この法律ができたのが昭和二十四年で、それから数えて今年がちょうど五十年なのです。五十周年ということで、「社会を明るくする運動」の一環としてボランティアの方の交流フォーラムを組んだり、今年はいろいろな企画を考えています。

更生保護の一環として犯罪予防活動にも力を入れる

本江　益子さんは、中学からバレーボールを始められたとか……。

益子　はい。中学一年のときに部活で始めました。

本江　全日本の代表になられるぐらいですから、相当練習も激しかったでしょう。

益子　きつかったです。中学、高校と、ぶたれない日はなかったですね。こんなこと法務省で言っていいのでしょうか（笑い）。

本江　非行の道に入るような余裕はなかっ

本江　威憙／法務省保護局長

〈ほんごう　たけよし〉昭和16年生まれ。東京都出身。昭和40年、司法試験に合格し、横浜地方検察庁検事、東京地方検察庁公判部長、金沢地方検察庁検事正などを経て、平成9年7月から現職。

たですか（笑い）。

益子　私の場合、非行に走るなんて、そんな余裕はありませんでしたね。

本江　実は私ども、罪を犯さない社会をつくっていくこともとても大切だということで、更生保護の一環として犯罪予防活動にも力を入れているのです。このところ、青少年非行が急増しているのはご存じでしょう。これは本当に大きな問題としてとらえているのです。

益子　先日、母に「私、反抗期あったかな」って聞いたら、「全然なかったわね」と。自分が好きでバレーを始めたんだから、最後まで責任を持ってやりなさいとは言われましたけど、勉強しろと言われたことはないんですね。何か得意なものが一つだけあればいいと。でも、練習が本当にきつくて、帰ってきて制服も着替えない、お風呂にも入らない、食事もとらないで、朝までソファで寝ちゃったりする生活でした。

本江　益子さんのように、勉強以外で打ち込めるものに恵まれた人は、非行の道などに入らないだろうと思うのです。しかし、現代は、学校でも勉強、学校から帰ってくると、すぐに塾に通わなければならないということで、少年たちにとっても非常にプレッシャーのきつい社会になっています。

益子　そうですね。

本江　もう一つは、女性がどんどん社会に出ていくようになりました。そのこと自体は非常に素晴らしいことなのですが、学校から帰ってきてもお母さんがいない、そして、子どもは塾へ通うという生活です。

　私の小さいころを思い浮かべてみると、もっと時間がゆったりと流れていたような気がするのです。学校から帰ると、鞄を玄関に放り込んですぐ外に飛び出していき、年上や年下の者まで含めた近所の友達みんなで草野球をしたり、川をせきとめて魚を捕ったり、そういう牧歌的な雰囲気がありました。勉強もするときはしたのでしょうけれども、勉強ばかりに追われたという感じではありませんでした。

　最近、特に、子どもの心を育てていくには、ある一定の、ゆったりとした時間が必要なのではないかと感じるのです。学校と塾でどんどん知識が詰め込まれていって、自分の考えをまとめたり消化したりする時間もない。そういう中で育っていくと、どうしても心の成長が追いつかないのではないか――。子どもたちをもう少しゆったりと育てる社会のシステムというものを考えていかなければいけないのではないかと思っています。

益子　そのとおりだと思います。

本江　野球にしても、バレーボールにしても、そこでエネルギーを燃焼させるということもありますけれども、昔は、近所の子どもたち同士の付き合いの中で、ルールを犯すと友達からしかられたり、グループの中でどういう形で自己主張すればいいかを覚えたりして、遊んでいるうちに、自然と社会性が身についていったものです。

益子　それがいまでは、学校では一方的に先生から教えられるだけ、塾へ行ってまた教えられて、常に一対一の関係しかない世界で大人になってしまうわけですね。

大事なことや悩みごとを他人に話せない現代の子どもたち

本江　先ほど、中学生と対話される機会も多いとおっしゃいましたが、最近の中学生を見てどうですか。

益子　話し相手がいない、親は信頼していない……ということをすごく感じました。中学生、高校生、あと、高校を卒業した、児童館の中ではお兄さん的存在の男の子など四十人くらいの中で、大事なことは親にちゃんと話すという子どもは二、三人しかいませんでした。親には勉強しなさいとしか言われないとか、大事なことや悩みごとを話すのは友達だったり。だれにも言わないという子どももいました。

本江　そういう子どもたちにとって、対話の場のようなものがあれば一番いいのですがね。以前は地域社会が濃厚な関係で残っていて、隣近所の人のことはお互いに全部知っているし、例えば、お祭りのような行事があると皆が力を合わせて一つのことをなし遂げる。そういった過程で、ルール違反があると、叱責（しっせき）される。そういう社会に生きていると、秩序というものがどのようにして保たれるかが自然に分かってくると思うのですが、地域社会がどんどん希薄になって、近隣関係も失われ皆が孤立する、少年たちも仲間というのがなくなってきて孤立していくという状況ですね。

最近、少年犯罪が非常に増えてきて心配しているのですが、これが原因だというものが一つや二つに絞り切れなくて、地域社会が希薄になっている、あるいは、家庭の中でお父さん、お母さんたちが子どもをどう育てたらいいのか、よく分からなくなってきているし、子どもからも信頼されない、などいろいろなことがあると思うんです。

益子　私、両親には本当に感謝しているんです。母にしても、途中からは働きに行っていましたが、おやつには、売っているお

益子　直美／スポーツコメンテーター

〈ますこ　なおみ〉昭和41年、東京の下町に生まれる。中学時代からバレーボールを始め、高校卒業後は「イトーヨーカドー」チームでエースアタッカー、全日本代表にも選ばれる。平成4年現役を引退し、現在、テレビ、ラジオを中心にスポーツコメンテーターとして活躍中。

菓子ではなくて、母の手づくりのお好み焼きとかドーナツとかをつくって食べさせてくれました。毎週日曜日は、朝早くから父と一緒に釣りに出かけましたし。ときどき家族みんなで船で海釣りに行って、釣った魚を父が料理して食べさせてくれたり、冬になると銀杏（ぎんなん）を拾いに行ったり。おばあちゃんがイナゴをつくだ煮にしたり……。

本江　昔はそういうことがありましたよね。そういう自然とたわむれる中でゆったりと育たないと、ぎすぎすした人間になってしまうかもしれません。しかし益子さんは、素晴らしい家庭に恵まれましたね。

益子　家族が自慢です。珍しいくらいに仲がいいですし、何でも言い合えるし、隠しごとはまずないですね。

子どもたちにもっとチャレンジ精神をもってほしい

本江　少年の問題は本当に深刻で、先進国では皆困っているんです。

益子　私の幼いころを思い返してみると、バレーボールに関しては、監督にも親にも褒められたことがありませんでした。自分は本当にこれで通用するのかとすごく不安でした。でも、いま考えると、「何々ちゃんは本当にうまいね」とか褒められたら、プレッシャーになってしまっていたと思うんですよ。

本江　監督にすれば、益子さんはエース級の器だから厳しく鍛えなければと、わざと甘いことは口に出さなかったのでしょう。

益子　ただ、私がバレーを始めて二か月ぐらいしかたっていないときに、中学時代に初めてバレーを教わったバレー部の先生がうちの母に、このままちゃんと育っていけば、将来、日の丸をつけられる選手になりますよと言われたそうなんです。そのことをバレーボールを引退する間近になって初めて母から聞きました。「先生はバレーを始めて二か月でそう言ってたんだよ。見抜いてたね」と。私は、図に乗らせない母もすごいなと思いました。もしそんなことを中学時代に聞いていたら図に乗っていて、いまの私はなかったかもしれません。

本江　もちろん天性の素質はおありになったのでしょうけれども、一つのことをやり遂げると、いろいろな意味で自信がつくと思うんですね。

益子　バレーボールをしていたころは、恥ずかしい話なんですけれども、一般常識をまるで知らなかったんです。〝かごの中の鳥〟状態の団体生活で、食べ物は合宿所の冷蔵庫を開ければいつでもある、着る物もジャージーだけどただでもらえる（笑い）。そういう環境に十何年もいたので、社会に出たとき、自分でいろいろなことを吸収しなければ追いつかないと思って、分からないことがあっても恥ずかしくないと思うことから始めて、例えば飛行機のチケットはどうやって買うんですかとか、そのレベルのことから、知らないことは素直に聞くようにしたんです。

本江　それは非常に大切なことです。私は検事ですが、最初は捜査の方法が分からなくて、勇気を出して聞くようにしてきましたが、恥をかきたくないからと分かったような顔をしていると、結局本物にはならないと思いますね。

益子　恥はいっぱいかきました。分からないのに知ったかぶりをするほうがもっと恥

です。分からないのなら分からないで、きちんと質問した方がいいと思ったんです。

本江　少年の問題は、社会環境の問題でもあるわけですが、子ども自身も、分からないことがあるのならきちんと聞いたり、やりたいことがあるなら、それに向かって猛烈に進んでいったりする、ある意味チャレンジ精神のようなものをもっともってもらいたいですね。

明るい社会づくりには地域のボランティアが不可欠

本江　ところで、一昨年でしたか、益子さんはフランスのスポーツクラブを視察してこられたそうですね。

益子　そうなんです。日本のスポーツクラブとは規模があまりにも違うので、びっくりしました。日本のスポーツクラブというと、年会費が高くて、一般の人は立ち入れない高級なイメージですが、フランスでは、地域の方が力を合わせてスポーツクラブを運営しているんですね。

　ボルドーの、あるクラブにおじゃましたのですが、サッカーコートは四面あるし、体育館も三つぐらいあって、テニスコートやプールもある。クラブハウスでは結婚式も挙げられるし、レストランもあって、そのレストランにだけやってくる人もいるんです。運営は、お掃除などもボランティアがやっていて、職員の方のお給料も街の人たちが出し合ったお金で支払っているらしいんです。

　フランスって小学校にグラウンドがないんですよ。体育の授業は地域のスポーツクラブへ行って、好きなスポーツを体験する。そこでスポーツをコーチしてくださるのは、金メダルを取った有名な選手だったり、そのスポーツクラブ出身のプロのサッカー選手がオフのときに戻ってきて練習したりするので、目標になる選手と一緒にスポーツができるんですよ。

本江　それは地域社会が残っているということですね。それと、ボランティアの精神が一体となった……そんな感じですね。

益子　ええ。休みの日になると、家族皆でやってきて、小学校の男の子がお父さんと一緒にテニスをしたりしているんです。いまの日本のスポーツクラブに六十歳とか七十歳のおじいちゃん、おばあちゃんが通う姿ってまず見られませんけれども、フランスではお年寄りが率先してスポーツクラブに通っていたりするんですね。子どもからお年寄りまですごく幅が広いし、普通の生活の中にスポーツクラブがあるという感じで、とてもびっくりしました。

本江　日本も、そういうゆったりした地域社会をつくっていかなければいけませんね。昔に戻ることはできないかもしれないけれども、それぞれの地域のボランティアの方々の力を借りて、何とかつくり上げていかなければならない思います。それが、ひいては犯罪のない、明るい社会づくりにつながっていくことでしょうから。

益子　私にも、何かお手伝いできることがありましたら、また呼んでください。友人とか事務所の後輩とかを誘って参加したいと思います。

本江　それはぜひよろしくお願いします。

益子　少年院にバレーボールを教えに行って、根性をたたき直すとか――たたき直すなんて言っちゃいけないですね（笑い）。